

自彊前進

NO. 18 平成29年3月3日(金)
附属新潟中学校 学校だより

※ 自彊前進…自ら努め励み、前に進むこと (校歌3番の詞から)

第69回卒業証書授与式

はなむけのことば

校長 柳沼 宏寿

本校の象徴であるくすの木も、春の日差しを浴びて生命の息吹を感じさせる今日
のよき日に、新潟大学教育学部附属新潟中学校第69回卒業証書授与式を挙
行できますことは、この上ない喜びです。

本日ご列席の保護者のみなさまにおかれましては、義務教育終了という節目を感
無量の思いでお迎えのことと存じます。立派に成長したこの118名は、教職員一同誇
りに感じるとともに、この成長を保護者のみなさまとともに喜びたいと思
います。そしてこの3年間、本校に深いご理解と多大なご協力をいただきましたことにも改
めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、新潟大学教育学部副学部長八坂剛史様、父母教師会会長大野隆章様、並び
にご来賓の皆様方には、ご多用のところご臨席賜りまして誠にありがとうございました。
卒業生及び教職員に代わりまして心より御礼申し上げます。

さて、卒業生のみなさん。ご卒業おめでとうございませう。国立大学の附属学校と
して全国の教育を牽引するという重要な使命を担いながらも、日々の勉学や部活動
そして生徒会活動に3年間よく頑張ってきました。この日を迎えることができたこ
とは、まずはみなさん自身の努力の積み重ねによるものですが、同時に、これまで
みなさんを支え続け、そして今日の晴れ姿を心から喜んでくださっているご家族を
はじめ、共に学校生活を過ごしてきた先生方や友人らの存在も大きかったのではな
いでしょうか。人生の新たな門出に際し、ぜひ、感謝の気持ちを伝えていただければ
と思います。

現在、世界は急速にグローバル化が進むと共に様々な「アポリア」、いわば解決困
難な課題が数多く浮上しています。民主主義や資本主義経済など、これまで常識と
思われていたことすら大きく揺らぎはじめています。この複雑化し予測不可能な時
代の流れの中で、あらゆる領域で求められているのが「革新的なイノベーション」、
つまり、従来の考え方の枠組みを超えた全く新しい発想によるアイデアです。新し
い発想が求められていると聞いて、みなさんはわくわくしてきませんか。私は、附
属新潟中学校で学んだみなさんこそ、そのような社会のニーズに応えることのでき
る資質を備えていると感じています。

校長として附属中に赴任して以来、私にとってみなさんの学びは驚きの連続でし
た。ときわ体育祭、すなやま完歩大会、演劇発表会、音楽のつどい等々、それぞれの
行事に込めた強い思い、そして、丁寧に議論を重ねていた運営、しかも、先生方
からの指示ではなく自分たちの意思と判断によって行動し、全校生徒が一丸となっ
て行事を成功に導いていました。まさに、生徒会のスローガン「自主独立・協同」
を体現している姿は感動的でもありました。異なる意見が交錯する中で進むべき答

えを出すことは、決してたやすいことではなかったでしょう。それは、一人一人が
自分以外の人を尊重する気持ちを持たなければ乗り越えられなかったことです。み
なさんはそれを繰り返し乗り越えてきました。つまり、そこに物事の本質があるよ
うな気がします。「革新的」であることは、単に目新しい奇抜な発想ではなく、物事
を複眼的にとらえることによって、今まで気づかなかつた、あるいは忘れ去られて
いた本質を浮き彫りにすることでもあるのです。

先日行われた立志元服式では、みなさんが、自らの歩んで来た3年間の様々な経
験をもとにして課題を明確にし、未来への指標となる言葉を提言していましたが、
どの発表も自信に満ちあふれ、的確で深い洞察がなされていました。附属新潟中
学校で鍛え上げた力量の高さを目の当たりにした思いです。みなさんなら、これか
らの社会の中でしっかりと活躍してくれるものと確信しています。ただし、決してお
ごり高ぶることなく、声なき声にも耳を傾ける想像力と配慮を持って、世の中を牽
引する真のリーダーになっていただきたいと願っています。

最後に、皆さんの入学式の折に触れた寄居浜にある坂口安吾の石碑について改め
てお話ししたいと思います。あそこに刻まれた「ふるさととは語ることなし」という
碑文について、みなさんはどのように読みとったのでしょうか。この文は、主体を「
ふるさと」とみるか「安吾」とみるかで意味が異なってきます。まず、主体を「
ふるさと」とみるならば、「ふるさととは自分に何も語ってくれはしない」となり、
ふるさとである新潟が安吾を突き放しているように解釈することができます。一方、
安吾を主体としてみれば、「ふるさとについて自分が語ることなど何もない」と逆に
安吾がふるさとを突き放しているようにも読めます。あるいはまた「ふるさととは
全く言うことがない」と絶賛していると読めなくもありません。いずれにしても、
「語ることはない」その背後にはふるさとで育んだ豊穡なイメージが無限に広が
っていて、安吾の小説家としての仕事そのものに表れていると言えるでしょう。

みなさんにとっての学びのふるさと附属新潟中学校は、もはや「語ることなし」。
これからは、みなさんが社会に対して発言していく番です。どうか、おおらかに羽
ばたいていってください。期待しています。



生徒の活躍

- 第15回日本ジュニア数学オリンピック(数学科)
甲信越・北陸地区優秀賞 3-3 朝妻 航祐
- 平成28年度「土砂災害防止に関する作文」中学生の部(国語科)
優秀賞(事務次官賞) 3-3 高橋まりあ
- 平成28年度薬物乱用防止「ダメ。ゼッタイ。」普及運動ポスターコンクール(美術科)
優秀賞 1-2 伊藤 敬子
- 国際協力機構(JICA)エッセイコンテスト(社会科)
学校賞 附属新潟中学校
- 新大全国書初大会(国語科)
団体賞 附属新潟中学校